

第17回 日本SPF豚研究会 講演要旨

平成19年5月25日

日本SPF豚協会 平成18年度年次報告 - SPF豚認定CM農場の生産成績について -

日本SPF豚協会 藤田 世秀

日本の養豚産業が戸数、飼養母豚数共に毎年減少を続ける中、SPF豚認定農場数、飼養母豚数は共に毎年増加している。そのSPF認定を受けたCM農場の生産成績集計結果を報告する。

一貫生産農場は135農場(昨年より4農場増)の集計である。全体として、農場回転率、農場飼料要求率、1母豚あたり年間肉豚出荷頭数昨年と変わりなかった。又、出荷肉豚1頭あたりA分類薬品費は昨年より若干増加した。

肥育用素豚生産(繁殖専門)農場は18農場(昨年より2農場増)の集計である。出荷子豚1頭あたりA分類薬品費は昨年と変わりなかったが、1母豚あたり年間離乳子豚頭数および出荷子豚頭数が若干減少した。肥育専門農場10農場(昨年より1農場増)の集計である。農場飼料要求率、肉豚出荷率、出荷肉豚1頭あたりA分類薬品費に大きな変化はない。

ピッグフローの改善によるPRRSコントロール事例

(有)サミットベテリナリーサービス 石川 弘道

PRRS対策に限らず、養豚場での疾病コントロールを実施する上で重要なポイントは、オールイン・オールアウトを含めたピッグフローを徹底する飼育管理方式である。オールイン・オールアウトを確実にを行うには、豚の生産の流れ(ピッグフロー)をしっかり守る必要がある。分娩舎で生まれた子豚は離乳後離乳舎へ移動され、その後肥育舎へ移動した後、肉豚として出荷される。母豚は交配舎で交配した後妊娠ストールへ移動後、分娩前に分娩舎へ移動し、離乳後再び交配舎へ戻る。この一連の流れがピッグフローである。豚はこの流れに逆らった移動をしてはいけない。分娩舎で発育遅延子豚を離乳後も分娩舎で飼育したり、戻し里子を実施したりすることは、典型的なピッグフローに逆らった管理であり、厳に慎まなければならない。

また好ましい生産方式と、好ましくない生産方式があることも同時に理解しておかなければならない。好ましい生産方式とは、繁殖農場はできる限り1箇所に集約し、その後の離乳舎、肥育舎へ行くに従い分散する生産方式である。反対に好ましくない生産方式とは複数の繁殖農場から離乳子豚が導入され、さらに大きな1箇所の肥育農場へ子豚が導入される方式である。病気のコントロールの第一歩は繁殖豚の免疫の安定化(または均一化)である。繁殖農場が分散していると、その第一歩である繁殖豚の免疫均一化が達成されず、常に不安定な免疫状態が継続され、農場内の病気がコントロールされ難くなる。

ここではピッグフローの改善によるPRRS対策の実例を紹介する。

スリーセブン・パーシャルディポピレーションによる成績改善事例

全農福岡畜産生産事業所 坂爪 義弘

中小規模農家におけるオールイン・オールアウト導入の方法として、スリーセブンシステムとパーシャルディポピレーションを組み合わせたシステムへの転換事例を紹介する。当該農場では、オールイン・オールアウトを実現する手段として、3週分の子豚ロットを集約するスリーセブンシステムへの転換と、既存離乳施設を定期的にオールアウトさせるナーサリー・ディポピレーションを組み合わせる試みを行った。対策のポイントは、パーシャルディポピレーション(PD)時における洗浄・乾燥・消毒の徹底と、隔離離乳施設を利用した定期的なPD実施であり、その結果、PRRS陽性農場においても子豚の離乳後事故率を低く維持させることが可能となった。

PRRSが清浄化されたか、と思われる農場例

(株)サンエスブリーディング 名越 仁宣

関東某所、母豚約100頭一貫農場において、平成10年にPRRSが原因と思われる流産が見られた。翌年の検査では、母豚群で6割(5頭中3頭)、肉豚群で8割(10頭中8頭)の抗体陽性率であった。しかしながら平成12年および平成13年は肉豚の陽性率0%(8頭および15頭中)、それ以降も平成14年が肉豚陽性率20%(15頭中3頭)、平成15年が0%(15頭中)、平成16年が5%(39頭中2頭)、そして平成17年以降は肉豚で抗体陽性豚は見られていない。しかし母豚群では毎年若干の抗体陽性豚が散見されている。当農場で特筆すべきは、農場主はPRRSの存在に関心が無く、PRRSに対して何か積極的な対策を行ったことは全くないこと。にもかかわらず、ほぼ清浄化したかと思われる要因には、オガ粉豚舎と昔から継続している飼養管理面にあると推測される。当農場は、分娩舎で離乳豚を2腹分混飼するが、豚群編成はこの一回だけで、その後は豚群毎にオガ粉豚舎に移動している。発表時には場内写真を含めてさらに詳しく報告する。

/以上